

ばならなかつた。

『訪ねる家が判らなくて、こゝへ迷ひ込んだんです。』

鐵つあんは、辯解をした。

『迷ひこんだつていふのか。あつちに柵があつたはずぢや、場合によつちや、貴公、家宅侵入罪ぢやぞ。』
老人は、鐵つあんが、墓の如くに沈着な態度をみせてゐるのに、すこし機嫌を直していつた。『よオし、以後、氣をつけ給へ。』

『ああ、もしく』鐵つあんは、向うへひきかへさうとするこの診察着の先生に、遽て、聲をかけた。
『なんぢや。』

『この邊に、キネマの撮影所をやつてゐる川田逸郎といふ人の家を、御存知ぢやないですか？』

『なに、川田逸郎！』老人は眼をキラリと輝かした。『川田は、わしのことぢや。貴公は、何者ぢや。』

『それがしは……』思はず、さういつて、鐵つあんはクス／＼笑ひだしたのだつた。

『いや、僕は、職業紹介所から、エキストラ志願でやつて來た煙山鐵夫といふものなんですが……。』

『うん、エキストラか。』川田逸郎と名乗る老人は、大きく肯いた。『んぢや、池へ飛びこむ方かの？』

『さうなんです。』と鐵つあんは答へた。（すると、おれが飛びこむといふ池は、この池なんだな。）さつき蹴とばした墓のことを考へて苦笑がこみあげてくるのだつた。

『ぢや、池について、かう廻つて來給へ。』川田逸郎氏は、手をふつて、右の方を指した。

池をグルリと廻つて、一團の灌木の繁みを向うに廻ると、小學校の教室のやうな、古ぼけた細長い建物が立つてゐた。川田氏は、その明けつばなされた戸口から中へ入つて行つた。室内は、もう大分薄暗かつた。カタリと一隅のスウキツチが鳴ると、室内にパツと電燈がついた。老人のうしろに從つて入つてゐた鐵つあんは、明るい電燈のもとに照しだされたこの室内の、異様な光景を見廻して、もうすこしで、呀ッと聲を立てるところだつた。

『なにも驚かんでもよい。』老人はニタリニタリと笑ひながらいつた。『これは、わしの實驗室なんぢや。』
『ははア。』と鐵つあんは、ペコンと一つ頭を下げた。

二十坪ばかりもあると思はれるこの室は、なんのことはない、科學博物館へ行つたやうな光景だつた。いや、それも、墓や蛙ばかりの博物館へ行つたやうなものだ、とでもいふ方がよいであらう。天井にも壁間にも、いろんな蛙や墓の掛圖が貼りつめてあり、赤や青で、どくどくしく塗りたてた墓の解剖圖が掛けてあつた。一列にならんだ、多數の硝子柵の中には、いろんな形の塚がならんでゐるが、要するに、墓や蛙に關する標本だつた。リノリウムを敷きつめた床の上には、何だか、得體のしれない機械類が、いろんな表情をして立つて居り、實驗臺の上には、大きな硝子鐘や、レトルト、さては電氣を測るメートルなどが、ごてごてと竝んでゐたのだつた。

『そこで、一應訊いておくが。』老人は、鐵つあん、驚愕にあへいでゐるやうな顔を、吐りつけるやうな眼つきでいつた。『君は、大丈夫泳げるかい。』

『そりや、大丈夫です。ですが：：』

『ですが、とは何ぢや。』

『僕の飛びこむといふのは、先刻の池なんぞでせうか。』鐵つあんは、たうとう口を滑らせた自分の心を嗤ひながら訊いた。

『違ふ。』老人は即座にいつた。

『では、ロケーションなんですか。』

『うむ、ロケーションぢや、たしかにロケーションぢや。』

『で、僕はズブの素人なんです。さつきまで、撮影技師も、俳優たちもあたんぢやが、時間になつたので、そりや、いゝだらう。實は、さつきまで、洋装の美人を脅迫して、いきなり、そいつを抱へあげる歸つて行つたんだ。君のやることは、たしか、洋装の美人を脅迫して、いきなり、そいつを抱へあげる。とスタコラ逃げ出す、そこへ逞しい青年がやつて来て、つまり二枚目ぢやな、そいつが君と格闘する。』

『ははア、よくある筋ですな。すると僕はそれから、どうなります。』

『君は池の中に投げこまれると、そのまゝ水底にもぐつて、カメラの見えないところまで、絶対に頭をあげないやうにするのだ。』

『たつた、それだけですか。』

『うん、それだけぢや。報酬は、即金で五十圓渡す。ただし、濡れる衣服はこつちで用意して置く。』

『結構な話ですな。』

『では、その中、前金として二十兩、承知なら、こいつを今渡して置くが、文句はないか。』

『文句はありません、使つて下さい。』

『では、ここに二十兩ある。この契約書に調印して置いて貰ひたい。』老人は、さういつて手の切れるやうな十圓紙幣を二枚、目の前に並べたのだつた。『撮影は明日の午前中にやるから、君は午前九時までに、こゝへ来てくれなさいかん。』

鐵つあんは、その二十圓を、ポケットにねぢこむと、歸り仕度をして立ちあがつた。』

『どうも腑に落ちかねますから、ちよいと伺ふんですが：：』

『オイ／＼よさんか、もう金をうけとつた後で、文句はいけないよ。』と老人は、鐵つあんで遮つた。

『それにしても、ほんのちよいとですがネ。』と鐵つあんは、眞劍の面持をしていつた。

『貴方は、こんな蛙の研究をしてゐなされる。』と、傍の卓子の上に、生皮を剥がれて、兩脚兩腕を赤裸裸に、ひきむかれ、厚い板の上に釘づけになつた藁を指さしながら『それと、活動撮影の方と、どんな關係があるんですか。』

『わしの墓の研究は、昔からぢや、こゝにこの家を建ててからだから、もう二十年にもならうか。いろんなことを研究した。この墓ぢやが（と、赤裸にむかれた墓を指し）これは古くから知られてゐることぢや、電流計の代りになる。ほら、電氣を通すために、この釘を押すよ。ど、どうだ、墓の足に電氣が通ると、墓の足がピクリと動くだらう。この動き加減によつて、電流の強さが判るんだ。どうだ面白いだらう。これはわしの本職なんぢや。』

老人は、さういつて、火の消えたマドロスパイプを卓子の上からとりあげると、燐寸を擦つて火を點けると、うまさうりにブカブカと黄色い煙を吸つた後、更に語りつづけた。

『活動の方は、わしが近ごろはじめた道楽なのぢや。實は、ちよつとした装置をこしらへたのが、或る人の注文で、使つてみようといふことになり、こんどの撮影を始めたわけなのぢや。明日になれば判ることぢや。』

蛙の話は好んでするが、活動の話は、あまり氣が濟まないらしい老人だつた。鐵つあんは不圖、この篤學者に『七墓團』のことを尋ねてみようかしら、この人だつたら少しは判るかも知れないと考へたので、川田老人の顔をチラリと見た。しかし、老人は急に氣難しい顔付になつて、

『用がすんだら、早く歸つてもらひたいネ。』と、つゝばなすやうにいつた。

鐵つあんは、『七墓團』のことを喋るのを斷念して、やがてこの薄氣味のあるい建物を辭したのだつた。外は、もうトツブリと暮れて、高い森と森との間には、大きな三日月が、置き忘れた妖魔の利鎌のや

りに、西空に懸つてゐた。

さて、それから一時間ばかり経つた後のことだつた。話は妙な方角にとんでゆかねばならぬことになるが、なにがさて、風來坊の鐵つあんの後につきしたがつてゆくことだから、どうにも作者の氣儘には、なりかねるのである。

鐵つあんは、今、淺草の、ずつと外れになる白鬚橋を、寺島の方へ渡つたところだつた。雷門あたりで、一杯やつてきたものらしい、いい顔の色だつた。左手に、ちよつとした折詰めを、ブラブラさせてゐるのが、いやに喜劇俳優じみて見えた。彼は一本道の明るい通りを、どこまでも府下の方へ歩いてゆくのだつた。警笛のうるさい踏切を越えると、左側に大きな活動館があつて、燭力の強い電燈に照しだされて、幾本かの幟が立つてゐた。店幅の廣い駄菓子店や、一尺七錢と書いた紅い布のぶらさがつてゐる呉服店や、『バツト品ぎれ』に『サククあり』と書いた別々の白い札がヒラ／＼してゐる煙草屋などが、競争のやうに煌々と街を明るくしてゐた。鐵つあんはそこを急に右手に曲り、ちよろちよると露次のなかへ姿を消したのだつた。

そこは、眼病のやうに薄暗い小路だつた。兩側から、灯の消えたやうな廂と廂とが額を突合はせ、黒とした二階のあたりからは、薄灯も洩れてはゐなかつた。でも、その露次には、不思議とザワつく人の往來があつた。それは、懐手をした下層労働者らしいのが三分、帽子をとつて手に握つた學生たちが二分、あとの五分は、鐵つあんと、殆ど同じやうな恰好をした背廣細民と呼ばれる階級の人達で、不

思議と、若い男ばかりだつた。彼等がすれちがふと、ブーンと異様な臭氣のするのは、どこにも捌け口のないエネルギーの匂ひばかりではなく、實はこの露次のどぶ板の隙間からムン／＼と立ちのぼる、種別の多い有機物の醗酵する異臭のせるであらう。

鐵つあんが通ると、鐵つあんだけではない。誰が通つてもさうであるが。その小暗い家の窓のあたりに切つた小さい四角な鏡ぐらゐの孔から、黄色い聲が投げかけられるのだつた。

『あら、洋さん、ちよいと、いゝわね。よつてらつしやいよ。』
するとまた次の小窓から別な聲がするのである。

『まア、あんた素敵だわ、今晚は。ちよいとこつちをお向きなさいよ。』

若しその方を、ふりむいたとすると、その小窓のどれにも、鮮かな照明の下に浮ぶ引き眉毛の濃い、唇が魚の鰓のやうに眞赤な、假裝それ自身のやうな若い天女たちの顔が――しかり顔だけが覗いてゐて、更に猛烈なる嬌聲をなげかけるのだつた。こゝは、東京の町はづれに、誰も知らないものはないといふ有名な私娼窟だつた。

鐵つあんは、その天女の小窓を一つから次の一つへと、入念に覗いてまはり、彼女たちから百人百色の挑発的な挨拶を浴びせかけられた。だが、露次をいくまがりかして、小窓小窓を歴訪してゆくうちに、たつた一軒、彼の前に美しい顔を向けたまゝ、何にも物いはぬ小窓の女があつた。

『あゝ、こゝだ。』鐵つあんは、小窓の縁に手をかけていつた。『やあ、今晚は、汐路ちゃん。いつものやうに、お前さんは泣いてゐるね。』

ツツーンと鼻をかんで、汐路が始めて聲を出した。『ハガキ見た？』

『うん、見たよ。』

『お金はあるかい、あがつて呉れる？』戀人はいちらしく聲をうるませていつた。

『おツとツとツとツ、そこまでいふな。鐵つあんは、稼がねえで来るやうな人間ぢやねえ。』

汐路は、つと立つて、傍の板戸をあけた。パクリと、明るい家の中が、口を開けたやうに見えたが、鐵つあんは、その蔭から土間へすべりこんだのだつた。

二階の四疊半には、小さなチャブ臺が一つあるきりだつた。あとから、トン／＼と汐路が、お茶をついで、上つてくると、嬉しさに、あとの襖をしめた。

『お土産だア『やつこ』の中申だ。』

『まア、鰻なの、ありがたいワ。あたし、鰻を見るたんびに、小さいとき栗橋にゐたことを思ひ出すのよ。』

『はは、何を思ひ出すんだい。』

『栗橋は、あの大きい坂東太郎といふ利根川が流れてゐる直ぐその傍にあるのよ。そこに、いゝ鰻がとれて、あたしたち、小さいときに連れてゆかれて、稻荷屋といふお料理やで、よく食べたことがあつてよ。』

『ふウン、栗橋『栗』といふ字がついてゐるな。』
『なにをいつてるのよオ。』

『いや、こつちのことだが、栗橋てえのは、何縣だつたかなア。』

『埼玉縣よ。』

『なに埼玉だッ！』鐵つあんは、ハタと膝を打つた『あの『玉栗』といふのは、埼玉栗橋から來てゐるのぢやないかなア。』

『鐵つあん、一體そりやなんのこと。獨り言をいつてサ。』

『おお、こいつは、お前にも聞かせてやらうよ、大變面白い話なんだ——』

『さういつて、鐵つあんは、ギヤレージの二階の襖を破いて『七墓團』の祕事を認めた密書の破片を手に入れた話やら、雜司ヶ谷にゐる蛙の先生のことなどまで、のこりなく物語つた末、懷中から例の紙片まで出して、汐路に見せてやつた。』

『まア面白い話だこと。』汐路は眉をあげて、にこやかに笑つた『でも、もつと、その密書の、他の部分が集らなくちゃ駄目だわ。』

『大きに、さうだ。』鐵つあんは顔をあげていつた『といつて東京中の襖を破いてあるくわけにも行かないしね。この襖もちよつと時代がついてゐるが、破いてみたいなア。』

『あたしのものなら、襖の五枚や六枚ぐらゐるズタ／＼破かせてあげるんだけどネ。』

『汐路さん、ちよいと。』入口の襖の外に、この家の朋輩の若干代の聲がした。

『なアーに。』汐路が立つて襖をガラリとあけた。

『ちよいと話があるんだけどね。』さういつて若干代は汐路の耳に口をあてたのだつた。

鐵つあんは、見るともなしに、入口の方を見ると、若干代のうしろに、見覚えの無いもう一つの顔があつたので、ギョツとした。

その顔は、サツと若干代の背後に消えたのだつたが、なんだか、女のやうな顔立だつた。汐路が室にかへつてくると、隣りでは、客の歸る氣配がした。

『となりの客は、女みたいだね。』鐵つあんは汐路に訊いた。

『あら、いやだ。あのひと男ですわよ。角帽かぶつた、脊の高い學生さんよ。もつとも、顔は、ノツペリしてゐるけれど、男よオ。』

『さうかな。今日は、いやに氣になることが多い日だ。』

『今日、あんた、あんまり考へすぎて、神經衰弱になつたのよ。早く一と寝入りしないこと。すぐなほつちまふわ。』

汐路は、押入の布團に手をかけながら、艶然と笑つたのだつた。

大河端を、フラ／＼歩いてゆく鐵つあんだつた。

いつもならば、今夜はすつぱりと、汐路の寢床に温かく眠るはずの彼だつたが、明日は撮影のエキストラに雇はれてゆかねばならぬことに決定つたので、一應自宅へ歸つて、なにかと、準備をして置かねばならなかつた。それで、この夜更け、電車もなくなつた午前一時近くともいふのに、鐵つあんは、フラフラと半分居眠りをしながら藏前橋の袂を過ぎ、折しも通りかゝつたのは、横網河岸だつた。

こゝは、右手が、眞黒な水のドブドブと石垣を洗ふ大河で、左手が、濟生病院に、本所公會堂に、安田公園、被服廠跡の震災記念堂といったやうな、薄暗い建物が押しならんだ、宵の内でも氣味のある、淋しい場所だつた。月も落ちたこの眞夜中あたりは墨を溶かしたやうに唯眞暗で、小蒸汽船も走つてゐないから、汽笛の響もきこえてこなかつた。

その横網河岸を、ものの半分ほども来たところだつた。砂利置場の蔭から、ヒラリと黑影がとびだし、鐵つあんの背後に忍びよると見えたが、

『待て……』

と聲をかけた。鐵つあんが振りむくその鼻先に、キラリとピストルやうのものゝ金具が光つた。鐵つあんは、活動寫眞で何時の間にか覺えてしまつた禮式によつて、兩手を耳の横あたりへ差しあげた。

『生命を捨るのが厭だつたら、てめえんちの襖から探さだした紙片をよこせ。』怪漢はふり絞るやうな、わざとらしい作り聲をして鐵つあんの心臓のあたりに、硬い銃口をつきつけた。眞黒な洋服をきてゐる

らしいが、頭から胸のあたりまで、スツボリと長い黒頭巾のやうなものを被つて、二つの眼玉だけがギョロギョロ光つてゐた。

『欲しけりや、くれてやるよ。』鐵つあんは無造作に答へた。『胸を開いて腹巻の底をさがすと大事に藏つてあるんだ。』

怪漢は、左手にピストルを持ちかへると、右手で、鐵つあんのチョッキの釦を外しワイシャツの前を開き、毛の襯衣を上へまくりあげ、やつと腹巻をみつけたのだつた。だがこゝで怪漢は、どうしたものかモヂモヂしてゐたが、遂に意を決したもののか、腹巻の中へ右手をソツとさし入れた。

『もつとグツと下だい。』鐵つあんは、呼吸をはずませていつた。

怪漢は、女のやうにオツ／＼した手つきで更にグツと腹巻の下に拳をさし入れた。その手首が太鼓腹とバンドとの間に、ギユツと締めつけられたと思つた。

『呀ッ！』

と怪漢が叫ぶ前に、

『バシーン！』

と鐵つあんの右の拳が、怪漢の持つピストルを、三間ほど横に叩きとばしてゐた。次の瞬間に二人の身體は、もんどり打つて地上に顛倒してゐた。鐵つあんは怪漢の頸を締めあげようとする、怪漢は、さうはさせまいとして、鐵つあんの顔をがりがりひつかいた。

どこに隙があつたものか、鐵つあんは、下から顎をグワンと突きあげられて、ちよつとクラクラと眩暈を感じた。その間に怪漢はスリと鐵つあんの懐をぬけて、立ちあがると、ピストルの飛んでいつた方向へ驅けだした。鐵つあんは、早くも危険を感じて、

『なにをッ。』

と叫ぶと、よろよろと中腰になつて、その後を追ひ、怪漢が地上をすかしてピストルの方に手を伸ばさうとしたその背後から、ムズと組付いた。かうなると鐵つあんのものだつた。彼は腕を噛みつかれ、向う脛を蹴とばされるのを齒をくひしばつて我慢しながら、怪漢の身體を徐に抱へあげると、川縁のところへ連れてきた。

『やッー』

と懸け聲をすると、ドブーンといふ大きな水音がして、あはれ怪漢は、大川の黒い水のなかに、叩きこまれてしまつた。

鐵つあんは、元の場所に戻ると、落ちてゐたピストルを、靴の先でポーンと大川へ蹴とばした。が、その傍になにやら光る丸いものが落ちてゐるので、拾ひあげてみると、それはコムバクトであるらしく、鼻のところへもつてくると、ブーンと高い匂ひ草の香りがした。そいつも大川へ投げ込まうとして、何を考へたものか、鐵つあんはポケットの中へ藏ひこんだのだつた。このコムバクトは、あの怪漢が落としたものとは、ちよつと考へられないが偶然に、ピストルと同じところに落ちてゐたと考へるのは、

一層奇蹟的なことに思へるのだつた。萬一、これが、あの怪漢のおとしものだつたら、彼奴は何故こんなものを持つてゐるのか。

鐵つあんは、先刻、汐路と逢つた隣り座敷から、こつちを覗いてゐた、女のやうな顔の學生のことを不圖思ひ出したのだつた。

『うん、いまの奴を、抛りこむんぢや無かつた。』

さういつて、鐵つあんは直ぐ川縁へ出て、暗い水上を、あちこちと透かしてみたがそこには、怪漢の泳いでゐるやうな影は、見當らなかつた。お陀佛になつたのか、それとも向う岸へ泳ぎついたので、鐵つあんは、裾のあたりの泥をバタバタと拂ひおとすと、兩國の方へ歩き始めた。

兩國橋を渡り、直ぐその横丁を二つほど曲ると、鐵つあんの宿がある。表では、最後に歸つて來た。仕切りなしの安フォードが、ジンジンと、睡さうな音を出してゐた。

内儀さんに感付かれぬやうに、うまく二階へあがるつもりだつたところ、

『鐵つあん、かい。』

寤音で、内儀さんは、いひあて、しまつた。

『へえーい、唯今、遅くなりまして……。』

『鐵つあん、今夜お前さんを訪ねて來た人があつたよ。』

『は、ン。』と鐵つあんは、例の癖で、うけ應へをした。『男ですか、女ですか。』

『お氣の毒さま、男だつたよ。』

『なにかいつて行きましたか。』

『いえネ、お前に會ひたいが、何處へ行つたらうかと訊いてたよ。』

『内儀さん、アレを喋つたでせう。』

『……………』

『いや、思ひあたることが、ありましたよ。』

鐵つあんは、私娼窟のことや、大河端の活劇のことを思ひうかべて、あの男が來たのだらうと、感付いた。『生白い學生でせう。』

『おや、お前さん、逢つたのかい。』

『えへへ、逢つたに違えねえ。』

さういつて、彼は梯子段に足を踏みかけた。

『それから鐵つあん。二階へあがつたら、襦をみてごらん、綺麗になつてゐるから……………』

『襦！』鐵つあんは、例の襦の解剖が、さては露見したなと思つて、横を向いてペロリと舌をだした。

『今日の夕方、女の襦屋さんが、いい襦を車につけて、賣りに來たから、うちの古襦をうつて、新しいのを買つたんだよ。』

『ほう、そりや豪勢な。』

『ところが、莫迦に安いんだよ。こつちの襦をやると、たゞみたいな値段なんだよ。』

『なに、只みたいに安い襦——』鐵つあんは、やつと意味が呑みこめたのだつた。

『またしても、例の一味か……………』

『なんだつて。』

『いや、こつちのことだが、ねえ内儀さん、その女の襦屋といふのは、脊の高い丈夫さうな女で、あたしを訪ねて來た學生の顔に、よく似てやしなかつた？』

『真逆——』内儀さんは、即座に打消したが、また言葉をつけたしたのだつた。『でも、さういはれると、あの學生さん、ちよいと人好きのする綺麗なひとで……………』

『オイオイ、よさねえか。いつまで、お前たちは喋つてやがるんだ。』

突然、内儀さんの横に寝てゐるらしい亭主が、太いバス聲でガミ／＼と怒鳴つた。鐵つあんは、遽つて二階の梯子段を、のぼつていつた。

二階には、誰も居なかつた。同室の面々は皆どこかへ繰りだしたものらしい。

鐵つあんは、寢床を敷くと、その中へもぐり込んだ。室の内部を見廻すと、よくもかう揃へたものだと思ふほど、押入には似たやうな模様の新しい襦が嵌つてゐた。

彼は思ひ出して、枕許の上衣から大河端で拾つたコンパクトをとりだしひねくりまはした。純銀製のかなり凝つた彫刻のある、あまり安くない品物であることが判つた。蓋をあけてみると、その裏面には、

フランス語で數十字が彫りつけてあつた。それは、鐵つあんには、なんのこともだか判らなかつた。だが、もし、フランス語に堪能な人がそれを讀んだとしたら、すくなくとも、不審の面持をして、首を横にふつたことだらう。實に、そこには、こんな意味のことが、彫りつけられてあつた。

『憂國の志士U・K嬢に贈る。一九三一年秋。伯爵MOより。』

鐵つあんは、そんなことは露しらず、コムバクトのいゝ匂ひを、食るやうに嗅いでゐたが、やがて今日一日の疲勞が急に發して、泥のやうな熟睡におちていつたのだつた。

さて、その翌朝は、快晴とはゆかないが、映畫撮影には、もつて來いの薄日に恵まれた日だつた。

ロケーションをすると聞いたので、日光へでも行けるのかと楽しみにしてゐた鐵つあんは、早くも大きい失望に囚はれたのだつた。ロケーションの地は、東京トーキー會社の川田逸郎氏邸から、ものゝ二町とも距つてゐない、同じく雜司ヶ谷の地つゞきであの地で有名な鬼子母神の境内のすぐ隣にあたる腰井彌左衛門氏邸だつたのである。

カメラ・マンは、腰井邸の廣い日本式庭園の芝生の上に、カメラを据ゑつけた。助手が四五人、手に反射板をもち、臺本とメガホンを持つた撮影監督のうしろに、つき従つた。主演男優の雪岡晶夫といふのが、ダブル釦の瀟洒なスタイルで、洋装をした若い女優と、小間使の扮装をした娘々しい女優と

を相手にボソ／＼話をしてゐた。そこへ、川田老人が書院づくりの母屋から立ち出でた。そのうしろから、もう一人、羽織袴の執事らしい四十男が現はれた。川田老人は、布袋さまのやうに、肥満した身體をゆりうごかして、竿の先についた蟲籠のやうなものを耳にかけて、ベーカーライトの目盛盤をいぢつてゐた。こつちの隅には、ラヂオの受話機のやうなものを耳にかけて、ベーカーライトの目盛盤をいぢつてゐる青い顔の男がゐるが、これは多分、川田老人の發明になるトーキーの録音機の調子をあはせてゐるものらしい。すると、蟲籠みたいなものは、マイクロフォンで、俳優たちの聲を寫す仕掛けなのであらう。それから、主演俳優たちの、ラヴ・シーンの稽古が始まつた。同じ仕草が、くどいほど、繰り返さるれ、同じ臺辭が、傍できいてゐる方で暗記ができるほど反覆された。鐵つあんは隅の方で、欠伸を噛みこころしたのだつた。

『どうです、先日さしあげた靈酒は、召しあがつたやうですか。』突然、こんな言葉が鐵つあんの背後に聞こえた。川田老人の聲だつた。

『はア、ありがたう存じます。御前様は、大變喜んで、召しあがつてゐます。なんでも昔の支那のさる家へ賓客に迎へられたとき、あのやうに、甘味い酒をいたゞいたとかで、かう衰弱してゐる身體には、浸みるやうに利くと、仰有つてゐました。』といったのは、家令の男だつた。

『やア、それは結構です。早く癒さんと、いかなですか。』
『どうも、いつも、色々とお骨折をいただきまして……。』

話の様子では、この家の主人、腰井彌左衛門氏は、病氣をしてゐるらしかった。

『ほう、貴方様は、金齒をおいれになつたやうですな。』駭いたやうな聲を出したのは、家令だつた。

『……』
 『貴方様は常々『自分は、高壓電氣をつかふので、金齒とか金縁の眼鏡とかは、危険だから、絶対にしない』と仰有つてでございませんでしたか。はッはッは。』

『いや、こいつは、やむを得ず、最近入れたのでして、それといふのも、経験から考へまして、大した害になるものでもない……』

川田老人は、何か、クドクドと、辯明をしてゐる様子だつた。

主役の稽古を終つた。こんどは、鐵つあんの番だつた。彼は、監督から前の方へ呼びだされた。そこには、主役女優の春日卯子の眩しい洋装すがたがあつた。この女優にギユツと抱きつくのかと思ふと、彼は真剣な氣持になつて、耳朶がポツとほてつてくるのを覺えた。

『あたし、ちよつと失禮して、御不淨にゆきたいんだけど、あそこは、どこなんでせうね。』

『さアーね。』監督は、困つたといふ表情をした。

執事は、それを聞きつけて、それなら、向うの書院の裏手の縁つゞきにあるから、裏から廻つてゆくやうに、但し、御前様は御不例であるから、靜かに歩くこと、また御前様の御洗面所へは、間違つて入つてはならぬことをいひ渡したのだつた。向うの棟から、ボンボンと、午前十時をうつ時計の音が、ひ

びいて來た。

『もう十時ぢやないか、早くはじめないと、ひるまでに、全部おしまひにならねえぜ。』

監督が、いら／＼した聲を張りあげた。その聲の下に、春日卯子は『皆さん、失禮！』といひながら、ハンドバッグを小脇に、手帛で手をふき／＼歸つてきたのだつた。

稽古が始まつた。鐵つあんの役割は、一見なんでもないやうに見えて、しかもタテがあるために、何かと面倒であつた。鐵つあんは、

『もう一度、やりなほしー』

といふ監督の聲をき、流しつゝ、幾回となく、女優の身體を抱きすくめたり、擔ぎあげたりした。それは彼にとつて、豫期した以上に、結構なことだつた。彼は段々と大膽になつて、春日卯子の大きな肉感的な胸中を、思ひきつて、ギユツと抱きしめたり、間違つたやうなふりをして、そのふつ／＼盛りあがつた乳房のあたりに觸れたりした。女優は、別にいやな顔もせず、いやそれどころか、鐵つあんの腕に進んでグツと寄りかかるかのやうに、桃色の肢體をくねらせるのだつた。そんなときに、胸のあたりが開いて、シユミーズと牛乳色に彎曲をした胸のあたりに隙間ができたり、或ひはスカートが捲れてコルセットがブルンと震へたりすると、鐵つあんの全身をとるかして仕舞ひさうな妖香のほひが、してくるのだつた。鐵つあんは、その香りを盗んでゐるうちに、昨夜、大河端で拾つたコンバクトの香りを思ひうかべた。それは、何とはなしに同じ香料の匂ひのやうに思はれてくるのだつた。さう考へると、

かうやつて自分の腕に締つけてある春日卯目子の身體が、昨夜、ノツシ、ノツシと抱きかかへて大河端に抛りこんだあの怪漢の身體つきに、似てゐるやうな氣がしたのでつた。
 (だが、それは、昨日から、つきまとはれてゐる怪し氣な女が残していつた呪文のせゐなんだらう。それに違ひあるまい。)

鐵つあんは、さう考へたのだつた。

『もう三十分もかゝつてんだけれど、一向にうまくやれないね、君は。』監督が、鐵つあんの方を睨みつけて、吐きだすやうにいつた。『その邊で、よし。ぢやいよく撮影だ。』

監督は、臺本をバラバラとめくつて、左手にもつたメガホンを口にあてた。

『最初は56から、やりませう。』

『ちよつと、待つて下さい。トーカーの方がいけないんだ。』トーカー係の助手が叫んだ。

『なに、いけないいつて。川田さんは、どうしたんだ。』

『さつき、別の装置をとりに行きましたよ。』

『おやおや、困るね、お正午までに、これぢや、濟まないぞ。』監督は、メガホンを、芝生の上に叩きつけた。

『わしが、ちよつと見て來ませう。』ぼんやりと、女優の顔ばかり眺めてゐた執事が母屋の方へ、ひつかへして行つた。

すると、書院のうしろから川田老人が汗を拭き拭き、片手に小さい靴のやうなものをぶら下げて現はれたのだつた。

『やあ、もう大丈夫です。』さういつて老人はハアハア呼吸を切りながら、トーカーの録音機の中に、何か別の小さい装置を入れたのち、手を高くあげた。『さア、始めて下さい。』

そこで始めて撮影が開始せられた。

監督が、赤い風船の糸をグツと伸ばして、それが高く中空にあがると、俳優と擬音係の外は、啞のやうに沈黙した。

撮影が、第四番目に進んで大分離れたところにカメラが据ゑられると、急に薄日がさし、壁の上に屋根の廂がハッキリ映つた。今度は書院のほとんど全景を含んだ廣い場面の撮影が始まつた。その撮影の途中、ちよつとした椿事が惹きおこされたのだつた。

それは撮影中、正面の書院の襖が、どうしたものか、バツタリと外れて、前に倒れたのだつた。人々はもうすこしで呀ツと叫ぶところだつたが、監督が手を振つて制したので、やつと聲を出さずにすんだ。

だが、その襖の開いたあとに、一同は何を見たのだつたらうか。

そこは、書院の表の間に續く、もう一つの奥の間だつた。表の間には、無論、誰もゐない。その奥の間の襖が外れたのだつた。奥の間には、瘦せこけた、蒼白の老人が、ふかぶかとした安樂椅子のやうな

ものに倚つてゐた。白い羽二重らしい寝間着をきて兩手を肘掛けの上に、行儀よく竝べてゐた。

その老人は、この家の御前様である腰井彌左衛門氏その人にちがひなかつた。

襖がバタンと、倒れると、老人は、病人らしくもない元氣な動作で、ギユツと首を右に曲げて、襖の外れた鴨居のあたりを眺め、左手を垂直までにあげ、それから右脚をグツとろしるへ引いて、驚愕の様子に見うけたがすぐそのまま前のやうな姿勢にかへつた。それから、口をモグモグと動かすと、割合に大きい聲で何か叫んだやうだつたが、それは小間使でも呼んだのであらうか、兎に角、皆の方には、不明瞭で聞きとれなかつた。その老人は、それきり、ネヂの止つた人形のやうに動かうとも、聲を發しよるともしなかつた。

執事が、吃驚仰天して、庭から母屋の方に駆け出さうとして、監督に叱られた。

その一場面の撮影がすむと、執事は、大急ぎで駆け出した。

『襖をたてたら、直ぐと引つかへして來なさいよ。』川田逸郎氏が注意をした。『今度は、君もエキストラで出演するのぢやからな。』

『ぢや、少々お待ち下さい。』

こつちでは春日卯目子が、蒼白な顔をして、グツタリと男優の胸に凭れてゐた。どうやら、唯今の異變に、腦貧血をおこしたものらしい。

『もう大丈夫よ。』やゝあつて、春日卯目子は、また震へのある聲で、さういつたのだつた。

執事は、書院にかけあがると、奥の間の老人のところまで行つて、お辭儀を一つペコンとした。それから仆れた襖を大急ぎで嵌めると、又候、庭園の方へひつかへした。奥の間の老人は、睡つてゐるのか、怒つてゐるのか、ウンともスンともいはなかつた。

こんな、ちよつとしたグロテスクな餘興があつて、それから後は撮影が順調にすゝんで行つた。川田逸郎氏は、上衣をぬぐやら、ワイシャツの袖をまくりあげるやら、いよく緊張した指揮をとつて、撮影機の傍を離れようともしなかつた。

その後、二三場面の撮影があつて、いよく、執事の出でくる場面があつた。

『川田さん、僕の出るのは、いつごろなんですかね。』鐵つあんは、欠伸を噛みこころしながら、ソツと訊いてみた。

『君のは、池へ飛びこむんだから一番最後にまはるんだ。その石段を下ると、池があるから、なんだつたら、ちよつと覗いてきたまへ。』川田老人は、蒼蠅さうに答へた。

鐵つあんは、母屋と芝生を挟んで、その反對の方角にある石垣を降りて行つた。そこには、大きい池の水面が、白く光つてゐたのだつた。池の大きさは、川田老人のうちにあるものよりは、やや廣く睡蓮らしい圓形の葉が靜かに浮いてゐた。鐵つあんは、足許の石塊を一つ拾ふと、なんとはなしに、池の面を目懸けて投げてみた。

『バチャッ！』

妙な音がした。ドポーンと、高い水音がしなかつたのだつた。

(もしや……)

鐵つあんは、首をのぼして、水面をジロジロ眺めたのだつた。

『呀ッ、あた、あた！ 墓のやつが……。』

鐵つあんは、もうすっかり興を醒ましてしまつたのだつた。いや、むしろ、何かヒヤリとする無氣味なものを脊筋に感じたことだつた。川田老人の話に『池は違ふ。』とのことだつたが、墓のあることにおいては、同じだつた。五人や六人の荒くれ男を相手にすることは、大して苦痛ではない鐵つあんも、この打ちつゞく墓の呪ひにはすっかり胃を脱いでもつた形だつた。彼は芝生の方へ歸つて、川田老人に、『蛙のぬない池へ、ロケーションを持つていつて貰へないでせうか。』と談判する決心をした。

元の石段をのぼつて、芝生の上に出ると、これは一體、何事が起つたのだらう、そこに居た人々は、ワア／＼と立ち騒いでゐるのだつた。それは、撮影の筋ではないことは、血の氣のない面をしてゐる一同の顔色で、それと直ぐ判つた。

『どうしたんです。』鐵つあんは、直ぐ傍にゐた女優の春日卯目に訊いた。

『さつき見えたこの家の御主人が、死んでなざるんですつて……。』

『死んで……、えッ、あの老人が、ですか。』



そこへドヤドヤと、撮影助手や、男優たちが、押されるやうにして駆けてきた。

『死んでるんじゃないんだ、殺されちまつたんだよ。』

『なに、殺されたのか。』

『こんな安い日當で、人殺しの係合になるなんて、いやだなア。俺は、ずらかるぜ。』

『おい待て、俺も行くッ。』

わッといふと、一同は逃げだした。鐵つあんも、急に腰のあたりがグラグラしてきた。

『おいらも、逃げちまへッ。』

鐵つあんは、池の方から雑草を踏みこえて、ドンドン逃げ出したのだつた。途中でちよつと背後をふりかへつてみると、向うの灌木の林の中を、春日卯目子が、淡紅色のスカートを、ひらめかしながら、兎のやうに軽快に逃げてゆくのが目に入った。鐵つあんには、彼女までが何故、遠てふためいて、逃げてゆくのか、ちよつと、譯がわからなかつた。

『待てよ——』鐵つあんは、不圖氣がついて、チョツキの内隠袋を、手さぐつた。

『呀ッ、やられたッ。』

内隠袋に入れて置いたコンパクトと、その中に挟んでおいた例の密書の紙片とが、影も形もなくなつてゐた。

鐵つあんは、それつきり、行方不明になつてしまつた。

そこで作者は、『腰井彌左衛門氏殺害事件』について、それから以後に判明した数々の、奇怪きはまる事實について、物語をすゝめたいと思ふ。

彌左衛門老人の死を發見したのは、執事の倉本といふ男だつた。

彼は書院の廊下に突立つて、人々を呼んで、急を告げたのだつた。

撮影監督や撮影技師は、さすがに踏みとまつて、川田逸郎と共に、老人の居間に駆けつけた。老人の五體は、氷のやうに冷えてをり、脈搏は全くなかつた。

なほよく老人の姿に注意してみると、寢間着の白羽二重の胸のあたりに、ポツンと一點、赤いものが滲みでてゐるのだつた。皆がよつて、それを脱がせてみると、衣服の下はベツトリ、鮮血に濡れてゐた。

『呀ッ。これは大變だ！』

執事が大聲をあげた。

蛙の先生の川田逸郎は、この間に處するに泰然自若として、臺のやうに落付きはらつてゐた。彼は、一同をキビ／＼と指揮して、醫者を迎へにやるやら、警察に電話をかけさせるやらした。腰井家は、文字どほり、上を下への大騒動であつた。

警視廳からは大江山捜査課長をはじめ鑑識課員に至るまでの係官一行、それから吉矢豫審判事、検事局からは雁金検事といふ、帝都の暗黒界の鍵を握る人達が續々と、この雑司ヶ谷に集つてきたのだつた。その上で、型の如く、嚴重な検視が行はれたのだつた。

腰井老人の直接の死因は、心臓部の眞上から、非常に鋭利な薄齒のナイフを、さしとほされたことにあつた。こんなひどい傷を負ひながら、老人の衣服が、大して血潮に穢れてゐないのは、老人には兇行直後、更にもう一枚の白羽二重が重ねられてある結果だつた。

老人は、愛用のフカ／＼した安樂椅子に腰をおろして眠つてゐるときに、イキナリグサリとやられたものらしい。

しかし、老人は、さうでなくとも、容易に恢復しがたい憔悴のために、早晚死ぬべき運命が定まつてゐたのだつた。

『死亡時間は、どうだね。』大江山捜査課長は、警察醫に訊ねた。

『どうも、こんなにひどく弱つてゐる老人の場合には、ハッキリしたことがいへませんが、まあ午前十時から十一時の間でせうな。ひよつとすると、もつと後のことかも知れませんが、』

『午前十時から十一時まで——か。もつと違算あるやも知れず、といふのだな。よしそれでは、皆さんについて、一應、見たり聞いたりしたところを伺つとかう、集めて下さい。』

それから、一同が一人一人、係官の前によび出されたのだつた。その陳述は、前に詳しくのべたとほ

りだつた。ただ、最も重大なる時間の問題について、復習をするならば

午前九時十分……一同、庭園に勢揃ひ

午前九時十五分……稽古開始

(午前十時……女優春日卯子が便所に立つ)

午前十一時頃……腰井氏病室露出事件

午前十一時卅分……撮影中止

となる。

もし、警察の診斷に、信をおくならば腰井氏は女優春日卯子が、便所に立つてから、鐵つあんの稽古が始まり、本撮影がつづけられて、腰井氏の病室が暴露する前後までのうちに、殺されたこととなるのだつた。

しかし、それは極めて、あり得べからざることだつた。なぜならば、腰井氏は、午前十一時ごろまでは、たしかに生きてゐたのだつたから。

腰井氏病室の襖がポーンと仆れたとき、彼の老人は、襖の外れた鴨居の上を見上げたり、それから手や足まで動かしたことは、川田逸郎、執事をはじめ、監督や撮影技師、それから、これは逃げてしまつたが、助手やエキストラ連中も、等しく認めるところに違ひなかつた。だから、もし殺されたとする、襖を閉ぢたあとに、誰か病室に忍びこんで、老人を刺殺したものとか考へられなかつた。

では、誰が忍びこんだのだらう。すくなくとも撮影に従事してゐる一行は、場所からかなり遠く離れて仕事をしてゐたのだから、彼等一同は、無関係と見なさなければならなかつた。すると、撮影團一行の外には、誰が殺しえたらうか。

第一に、疑つてみなければならぬのは、腰井邸にゐる雇人たちだつた。それは、小間使が二名、看護婦が一名、家政婦が一名、女中が三名に、下男と書生とが一名づつに、例の倉本といふ執事だつた。彼等はズラリと、係官の前に並べられて、それ／＼訊問をうけたが、誰一人、あの時間に、腰井氏の病室に入つたものは無いといふのだつた。それは嘘の陳述ではないことは、永年の經驗をつむ係官の、ハッキリ認めるところだつた。看護婦の不在も一應は可笑しいけれど、きいてみると、腰井氏のお薬をとり、近所の醫院へ出かけたあとだつたといふのだつた。

これには、さすがの名捜査課長の大江山警部も、ほとほと困りぬいてしまつた。人殺しはあつた。しかし犯人らしいものは一向に見當らないのである。

『倉本君、ちよつと。』大江山課長は、何を思つたか、執事をよんだ。『君に尋ねるが、この家には一向家族らしいものがあるが、やがて遠方からでも、親類がやつてくるのかネ。』

警部は、いよく困つて、別の方面を調べるつもりらしい。

『いえ、ところがですね。』倉本は、それを遮つていつた。『御當家には、御親類は一軒もないのでございます。』

『まさかネ。』

『いえ、全く本當なんでございます。御前様は、何時も、獨り者の話をなさいましたし、私も、系圖を拜見して存じてをります。たゞ……』

『唯——どうしたといふのか。』

『唯、なんぞでございます。これは大變昔のことで、左様、私の少年時代のことで、亡くなりました私の父が家令として御仕へ申しあげてゐた時のことで御座いますが、一軒だけ、親類づきあひをなさつてゐたところがありました。』

『ふうむ。』

『それは、花岸庄兵衛さんと、おつしやる方でした。これはもう二十何年前のことでございます。その後、庄兵衛さんは、おさわといふ婦人と御結婚なさいましたのですが、その後一年ほどして、當地を御退散になり、それ以來、杳として御行方が知れないのでございます。』

『生きたか、死んだかも知れないのか。』

『はい、そのところは、私は存じませんが、御前様のところへは、その後一、二度御手紙が届いたやうですが、それも間もなく跡絶えて、もうかれこれ十五、六年も、御便りがないうやうでございます。』

『外に、この邸に出入してゐた者はないか。』

『はい、それは……。』執事は、傍に立つてゐる蛙の先生、川田逸郎の方をチラと見て口籠つた。

「こつちから、名乗りませう。川田逸郎は、脂肪肥りの體を、重さうに、警部の前に運んだのだつた。『當家へ出入してゐるものは、わし位のもですな。當家の腰井さんは、大の變物でしてな。そんな變物に友人が出来たとすれば、やつぱりそいつも變物に違ひないのでして、はッはッは。』

「貴方は、どういふ御關係の方なんです。」

「いや、それは、私が御説明しませう。さういつたのは、執事だつた。

彼は、川田逸郎が、十五年近くも、隣りあはせのやうなところに住んで、永らく蛙の研究をやつてゐること、當家の池にも蟻があるところから、話に来て、すっかり御前様と仲善しになり、今日では唯一の隣人、かつまた、知己として、御前様の相談相手になり、何かと面倒をみてくれる義侠的な篤學者だ、と説明した。

警部は、川田逸郎の正體が、やつと呑みこめたといふ面持をした。

「ぢや、貴方のやつてゐられるといふ活動寫眞の撮影は、一體どうしたもんなんですか。警部は、このとき、川田氏に尋ねた。

「あれは實は、上海にをります知人から註文をうけましてな、ちよつとした短いものをつつて送ることになつたんです。撮影も、かうなつては、尻切れ蜻蛉で、いやはや飛んだ目に遭ひます哩。」

「なにか、参考になるかも知れませんか、今日撮影のフィルムは、一時お借りして行きますよ。」

「いや御心配には及びません。警視廳で現像をして、一本複寫をとつたら、直にお返しします。」

それでもとは、川田老人はいひ出さなかつたが、明かに、當惑の表情をみせたのだつた。

そんな譯で、事件は不可解のまま、係官は、見張りに數名の警官と私服とを残して一時腰井邸を引揚げていつたのだつた。

腰井彌左衛門殺害事件があつてから、二日ほど後、東京市民は、また別の不思議な事件を、毎日のやうに、新聞紙上で讀まされることになつた。

それは、ちよつとこんな風の記事だつた。

襖強盜またもや淺草に出沒

昨夜襲はれたは三ヶ所

満帝都を、恐怖と苦笑とに導きつゝある、既報二人組の襖強盜は、昨夜突如として淺草管内に現はれ、午後十一時三十分、今戸町百十六番地薪炭商福原茂助（五十五）方に忍び入り、例によつてピストルをつきつけ、階下四疊半にある襖二面を刃物を以つてそつくり截取つて立ち去つた、因にその外には一物も取らず又二階にある新調の襖には眼も呉れなかつた。次に午前零時、同人と覺しき二人組は、橋場町二丁目九番地駄菓子屋松井彌次郎（四十五）方を襲ひ、同様襖二面を截取りたるのみにて立去り、更に

午前二時、田中町百五番地米屋和田萬十郎（三十六）方に押入り、これまた古襖三面を截取つて立去つた。その際、雇人宗方久一（十九）は布團の間より祕かに強盗を透見せるところ、一人は背丈すぐれたる壯漢にして今一人は五十あまりの男にて、この方はブルブル脚を震はしをれるのを認めたと語つた。

襖強盗第二世あらはる

これは一人稼ぎの強盗

今晩午前三時、本所區原庭町三十九番地佃煮商加藤細吉（四十一）方に、襖強盗が押入り、家族一同を細綱で縛りあげたる後階上階下合はせて十七枚の襖を一枚残らず引裂き、その後、表の間に電燈をつけ調べたる模様あり、求むるものがなかつたものか、悉くその場に遺棄して立去つた。覆面せるを以て詳かではないが、歩きつきから見ても、女性らしくもあつたといふが、これは襖強盗第二世であつて、第一世の二人組とは別働隊らしい。兎に角、女強盗が出るとは、物凄い世の中になつたものである。云云。

こんな珍妙な記事に竝んで『襖問屋の主人行方不明となつて三日間』などといふ記事までが、仲間入りをして、デカ／＼に報道された。この人は千束町三丁目の大川屋號、紙野縞造（四十八）といふ、脊高からず、中肉の年配者であるが、商用に赴いたまま、行方不明になつたといふことであつた。

警視廳は、腰井氏殺害事件の迷宮入りに弱つてゐるところへ、こんな途方もない莫迦氣た強盗が流行

りだしたり、新聞が面白がつて書きたてるものだから、捨てゝも置けず、非常線を張つたり、巡回を増したりしたが、一向に網にはかゝらなかつた。

警視總監は、事件が、まず／＼面白くない方に展開するのを見て、大江山捜査課長の機嫌をすこしばかり損ずる憂ひはあつたが、決心するところがあつて、遂に、當時賣り出しの素人探偵、帆村莊六を招いて、事件の解決を依頼したのだつた。

素人探偵、帆村莊六——といへば、まだ乳くさい若者で、理學士といふ變つた肩書の持ち主だが『赤躍館事件』だの『麻雀俱樂部殺人事件』だの『省線電車射撃事件』だのといふ、近頃での難事件を、一風變つたやり方で、見事に解決したところから急に前途を云々されだした。いはゞ未知數の名探偵だつた。

『これは今聞きしたところでは——』と、帆村莊六は總監の前で、首を曲げた。
『想像以上に大きな事件かも知れません。兎に角、僕に何ができるか知れませんが、粉骨碎身、一つやつてみませう。』

さういつて、彼は特に乞うて、腰井邸の撮影フィルムを借りうけ、總監室をどことなく、出ていつたのだつた。

さて話はかはり、作者は、久振りに、煙山の鐵つあんのを御覽に入れねばならぬことゝなつた。風來坊の彼が、ぬーツと入つて來たのは、例の私娼窟、汐路の室だつた。

『随分ひどいわねエ。』汐路は、いつものやうに涙をふきながら、でも心から嬉しさに眼をあげた。』とこへ行つてたのさア。』

『その話は、あとでゆつくりするとして……』鐵つあんは軽く逃げた。『今夜はゆつくり寝たい。』

『ほほ、さうでせう。毎晩お勞れでしたらうからね。』

『妙なこといひつこなし』鐵つあん、ムクリと起きあがつた。『それとも萬事、察してゐるかア。』

『そりやネ、あたいの情人のことだもの、『襖強盜』なんて、をかした名前をつけられ、ば、はーンと察しちまふわ。』

『さうかね、えれいもんだな。』

『あんたの連れの人だつて、察してゐるわよ。』

『はーテ、あの大將のことか。』鐵つあんは、眩しさに笑つた。

『あれは、襖問屋の大川屋の旦那でしょ。あの人、此處へ、ちよくちよく来るのよ。』

『なに、大川屋が来るんだつて……』鐵つあんはその場に坐り直した。『そいつは知らなかつた。』

『まア、いやな人。この間も、手紙で報せてあげたぢやないの。』汐路は、ちよつと顔を膨らせた。

『そいつは知らねえぜ、何だつて……』

『大川屋さんが、この襖を貼りかへていつたことをさア、横山町へしらせてあげたぢやないの。』汐路は入口の襖を指した。それはこの前見たのとは變り、すつかり新しく貼り直されてゐたのだつた。

『横山町にはゐないのだ。で、そいつは何時のことなんだ。』

『いまから七日前のおひるごろだつたわ。』

『うゝん、畜生。』鐵つあんは呻りだした。『それで判つた。あいつ、俺にふんづかまる前に手に入れて置いたんだな。いくら一緒に探しても判らないはずだ、御本尊が膚身離さず、温めておめでなさるんだ。』

『鐵つあん、どこへ行くんだい。』

『かうしちや、ゐられねい。あとから、また来るよ。』

鐵つあんは、表へ出ると、足に委せてドン／＼驅け出した。夜は、もうかなり更けてゐた。密書の紙片は、どこかで落としたのか、それとも盗まれたのか、彼の手には無かつた。彼は、もつと紙片が襖の中に入つてゐることを知つて、襖問屋の大川屋の主人を誘拐し、それを案内役につけて、目ぼしい家作を、強盜と呼ばれながら、探して廻つたが、遂に得るところなく、七日目にたりと根氣がつきて、先刻、言問橋の下で、大川屋を解放してやつたばかりだつた。彼は、幕地に、千束町の大川屋を目懸けて驅け出したのだつた。

もうそろ／＼十二時が打つころだつた。大川屋の裏口に忍びよつた鐵つあんは、耳を澄ませて屋外の氣配を窺つた。すると、裏の雨戸の方へ、誰か近よる蹙音がしたので、彼はサツと身をひいた。

眞黒な装束の怪漢が、しづかに現はれた。やりすごして置いて、彼はムズと組ついた。相手は、聲も立てなかつた。無言のうちに、二人は押しあつたが、鐵つあんの力が勝つてゐたのであらう黒装束をた

う／＼裏木戸の電燈の下にあたる扉ぎはへ、壓しつけてしまった。

『うん、手前だな、いつか横網河岸で、おれを脅しやがったのは。今夜といふ今夜は、手前の面を、ひんむいてやるから、覺悟しろ。』

『う、う、うウ。相手は呻るばかりだった。』

『さまア見やがれ。』

パツと、黒頭巾を、捲りあげた鐵つあんは、

『呀ッ。』

といつて、思はず手をゆるめてしまった。

『春日卯目子——』

死蠟のやうな眞白な顔だった。だが、鐵つあんは、グツと彼を睨みつけた彼女の殘忍性に光る二つの眼を、終生忘れることが、できなかつた。

兎に角、女優春日卯目子といふ女性、それからMの伯爵から憂國の志士と奉られたらしい彼女は、脱兎の如く、鐵つあんの手の下から逃げてしまつたのだつた。

鐵つあんは、初一念を貫くつもりで、大川屋の、一枚開いた雨戸から、屋内に忍び入つた。家の中は眞暗だつた。彼は懷中をさぐつて、シュツと燐寸をつけてあたりを見まはした。

六疊の間の、壁際に、先刻まで、行動を一緒にしてゐたはずの、大川屋の主人が、朱に染つて仆れてゐた。

『ひッひッひでえことを、しやがつた。』

燐寸の光の下に照らされたのは、無慘にも鋭利な兇器でザクリと刺し透された傷口だつた。開いた胸の、眞白い襯衣の右の片側が半分ほど、千斷られて見當らぬのは、大川屋が祕藏してゐた密書の入つてゐたところらしい。さて、その密書は、どんなことを語つてゐたか。それは空しく、鐵つあんの手を離れて、行方知れずになつたのだつた。彼は、大きい失望をいだいてその場に突つ立つた。

そのときだつた。ドヤ／＼と、人の飛びこんで来る大きな物音が、後の方にした。やつと、立ち直る違もなく、鐵つあんは、グリーンと頭部をうちのめされて、それつきり何もかもわからなくなつた。

何時間経つたか。鐵つあんが、次に氣がついたときには留置場の冷たい赤毛布の上に轉がつてゐたのだつた。頭がズキン／＼と痛むので、そつと手をやつてみると、驚いたことに、いつの間にもやら縋帯が巻きつけてあるのだつた。

その夜彼は思ひがけない人物の訪問をうけたのだつた。一人は白面の青年、帆村探偵、もう一人の老人は、名乗らなかつたけれど、新聞でよく存知あげてゐる偉人、大沼部正良伯だつた。

鐵つあんは、そこで吃驚するやうな事實を、帆村探偵から、一と通り聞かされたのだつた。彼には、暫らくのほどは、その眞偽に迷つたほど、驚天地異の秘聞だつた。簡單にいふと、かうだつた。

『最近、さる筋から、某元老の許へ（それは勿論、こゝに控へてゐる大沼部伯爵のことに違ひなかつた。）七墓園についての、秘報が傳はつた。七墓園といふのは、東洋方面を占める七ヶ國を縦貫する一つの偉大なる権力と財源とをもつ秘密結社の名だつた。それは一千年の昔に成立したものであつて、條件としては、結社全部の持つ権力と財力を、五十年づゝの割合で、七ヶ國の團員が、順番に、ひきついでゆかうといふのだつた。しかし、そこには、一つの但書があつて、それによると、AならAといふ團員に順番が廻つて、五十年といふ年月を完全に費すことが出来ればよし、もしAがその力を與へられて四十九年と三百六十四日を経たところで死んだとすると、それは完全に五十年を行使しなかつたものとして、Aの國では更に別の同國人たるBといふ團員、もしくはその家族または配偶者が、引繼ぐこととなり、新たに、五十年間、結社の力が與へられるのだつた。

『ところで、實は、唯今まで、七墓園の権力と財力を行使してゐたのは、吾が日本であつて、その團員は、先ごろ亡くなつた腰井彌左衛門老人だつた。しかるに、老人の預かつた五十年は老人が殺された丁度その日、しかも正確な時間は午前十時三十分で切れるのだつた。もし老人が午前十時に殺されたとしたら、結社のパトンは、そのまゝ、吾が日本に止められ、次の日本人Bに渡されるはずだつた。だがも

し老人が午前十時に殺されたとしたら、老人は五十年を費ひきつたものとして、結社七墓園のパトンは日本を離れて、次の國、それは今日中華民國と名乗る支那へ渡されることとなり、その承けつぐべき人の名も大體わかつてゐて、張玉鵬といふ人だつた。兎に角問題は、腰井老人の死亡時刻にかゝつてゐるのだつた。結社の力は、非常に強いもので、ひよつとすると、この五十年、日本帝國が、よく世界を相手に、いつも優秀な勝ちをしめてきたのは、七墓園の有する権力と財力のおかげだつたかも知れないといはれるほどだつた。だから、すこし話はきたないが、パトンが日本人に渡されるか、支那へわたるか、は國家として非常に大きな問題ではあるまいか。

『ところで、腰井彌左衛門老人は、結社の秘密を書いた覺書を、他人に見られまいと思つて、あまり凝りすぎた個所に藏つたため、かへつて密書を外へ流してしまつたやうな形になつたのだつた。それには、パトンの後継者の在家も、それから七墓園のパトンであるところの『老蟾珠』と呼ばれる名玉のことも、その他の重要事項と一緒に書きこまれてあつたのだが、それは遂に散佚してしまつたらしい。それは、彌左衛門老人の死亡時間と共に、何とか解決しなければならぬ問題であつて、ここ數日のうちには、ロシヤから、結社の委員長たるイワノキツチ・ウラミノフ氏が、傳達式を兼ねて秘かに來朝するといふ情報が、傳はつてきたのだつた。随つて事件は、即急に解決しなければならぬのだつた。

『それで、其の筋は、非常に焦り、春日卯目子といふ女までを使つていろいろ探し求めある程度の密書を掻きあつめたが、密書の最も重要な部分——ことに『老蟾珠』の在所と、後継者の行方とを示す部分

が缺けてゐるのだつた。無論、その残りの紙片を持つてゐる方でも、それだけ讀んだのでは、何のこともわからぬはずだつた。

『ところが、今日になつて其の筋を震撼させるやうなニュースが、突然入つてきた。それは、支那の團員である張玉鵬が、故國を離れて、既に我が國內に潜入してゐるといふのだつた。これは寢耳に水の情報だつた。いろ／＼審議した結果、腰井彌左衛門氏の知友であると稱する川田逸郎といふ男が、怪しいといふことに歸結した。

『から疑へば川田逸郎について不審な點は多かつた。しかも表からは乗りこんでいけない事情だつた。それに、おどろいたことには、腰井彌左衛門氏が、あの日の午前十一時には立派に生きてゐたといふ證據のフィルムが、早くも結社の本部へ送られてゐるといふのだつた。これを聞けば、川田逸郎が、張玉鵬か、またはその謀者らしいことは、あのインチキ撮影によつても知れることである。この際煙山鐵夫君に望むことはこれに關して見聞した細大のこらざる事實を、教へて貰ひたいことである。』

帆村探偵の長い物語りは盡きて、彼は額に浮かびあがつた珠のやうな汗をハンカチーフでソツと拭つた。

鐵つあんは、これを聞いて、鐵瓶のやうに興奮してしまつた。彼は、密書を襖の中から手に入れたことから、川田老人の裏山の怪池のこと、そして不思議な老人の實驗室のことから、あの撮影會の前後の模様、さては同じやうな池が腰井邸にもあつて、臺が浮いてゐたこと、等々、みんな喋つてしまつた。

『うむ。』と帆村探偵は拳をかためて、机をトンと叩いた。『一切の解決の鍵は川田逸郎の實驗室にあるんだ。では閣下、私はこれから行つて参ります。』

『ちよつと待つて下さい。』鐵つあんは、思はず帆村探偵に、すがりついた。『どうか僕も一緒に連れてつて下さい。』

大沼部伯爵らしい人は、大きく肯いたのだつた。

帆村探偵と鐵つあんとは、折からの暗闇を利用して、雑司ヶ谷の密林に忍び入り、魔の裏山から、臺の池の畔をグルツと廻つて、まんまと首尾よく、川田逸郎の實驗室の裏手まで潜入することができたのだつた。冷い夜露が下りて、蟹のやうに匍ひまはつてゐる二人の襟首に、時々ポトリポトリと垂れかゝつた。

『こゝに窓がある。』鐵つあんは、帆村探偵の耳許に、そつと囁いた。二人は、窓下に積み重なつてゐる材木の上に、靜かに伸びあがつて室の内を見た。

嗚呼、それは、なんと物凄い光景だつたらう。二人は、グツとこみあげてくる驚駭の聲を、兩手を重ねて、押し戻したのだつた。

見よ、そこには、室の中央に、大きな浴槽のやうなものがあつて、沸々と湯氣があがつてゐるのだつた。その丁度眞上に、これはまたむごたらしく、素裸にされて、口には猿ぐつわを、兩腕は背後に廻して針金の輪を、まきつけられてゐるのは、正しく若い女だつた。その女は、梁の上から、一本の綱でも

つて、垂直に吊るされてゐるのだつた。しかもその綱の端は、悪鬼のやうな嘲笑を浮かべることに夢中になつてゐる川田逸郎——いや、張玉鵬が握つてゐて、徐ろにそれをゆるめることに、裸形の女は、すこしづつ、湯氣だつ浴槽の中に下つていつた。

(何者だらう、あの女は！)

帆村と鐵つあんは、同じことを考へた。ふと見ると窓のすぐ向うの卓子の上に、見覚えのある淡紅色のスカートが投げ出されてあり、その手前には、これも又、忘れることのできないハンド・バッグが投げ出されたまゝ、口を開いてゐた。その間からキラリツと光るものが見えてゐるのであつたが、何やら黒ずんだ血痕のやうなものが附着してゐる、薄齒の短刀だつた。いまは、すべてを了解することが出来たのだつた。

果然、梁に釣るされた赤裸の女は、不思議の女優、春日卯目に外ならなかつた。

鐵つあんは、この女から、度々襲撃を喰つたことも忘れて、いきなり窓から、飛びこまうといふ氣配をみせたので、驚いたのは帆村だつた。必死になつて鐵つあんを押へつけた。

『煙山君、卓子の上をみたまへ、帝國の安危がかゝつてゐる紙片があるぢやないか。』

この帆村の言葉は、鐵つあんの心を動かすに、十分だつた。なるほど、よせ集めて四角につき合はせた一枚の大きな古文書が、窓硝子をあけさへすれば、手の届くやうな場所に載つてゐるのだつた。

『残念だ、届かない。』鐵つあんは、齒を喰ひしばつた。

『見給へ、チャンスは来るぞ。』帆村が興奮し皺枯れた聲を、絞るやうにして叫んだ。

『だが、あゝ、何といふ恐ろしいことを、おれは今、目の前に見てゐるのだらう。』

春日卯目の裸體は、徐ろに、湯氣たつ浴槽の中に、半分ほどもつかつてゐるのだが、グツと張玉鵬が綱を手許にひいたとき、グツと宙に浮かんだ女の死體には、腰から下が、最早見當らなかつた。あの湯氣立つ不思議な藥液の中に、水のごとく溶けてしまつたのだらう。

二人は、悪鬼張玉鵬が、同臭の敵とでもいはるか、同じく殺人鬼に分類されるべき春日卯目の髑髏殺しに酔ひ痴れてゐる間に、硝子窓をそつと押しあけると、手をのばして密書を盗みとつた。

帆村探偵と、鐵つあんは、死物狂ひで、窓下を逃げだしたのだつた。

そこは、ちよつと見ると倉庫のやうな、奇妙に狭い室だつた。室の隅々といはず、柵みたいな所といはず、なにやら油くさい不思議な機械が押しならんでゐた。室内はムン／＼と、吐氣を催すやうな異臭が充滿してゐた。しかし別に、ガタリとも物音は聞えなかつた。その室の中央に、五六人の人間が、人形かなんどのやうに、突つ立つてゐるのだつた。こゝは、——東京灣の海底にエンヂンを停めて横はる大潜水艇の内部だつた。

中央にスツクと立つてゐるのは鐵つあんが『あつちうら』とだけ讀んで、その謎をとときかねたイワノ

キツチ・ウラミノフ氏で、浦鹽からやつて来た秘密結社、この潜水艇の艇長であるとともに、七墓團の委員長である人物だった。

『それでは。』とウラミノフ氏は傍らを顧みていつた。『張玉鵬君は腰井彌左衛門氏が午前十一時まで生存してゐたことを支持し、さつきのトーカー映畫を證據として、提出されるのですね。』

『それに違ひないのだ。』いつの間にか、支那服にをさまつてゐる川田逸郎こと張玉鵬が、憎々しげにいひ放つた。『腰井氏は、あの時刻に、手足を動かし、首をふり、聲を出したのぢや。』

『それは子供だましの欺瞞です。』さういつたのは、反對の側ににこやかに微笑みを浮べた帆村莊六だった。『腰井氏は、春日卯目子といふ女のために、午前十時、短刀を以て刺殺されたんです。彼女は一切を、ここにゐる遺書に書き、證據を添へてをります。春日卯目子は便所を探すとみせかけて、腰井氏を刺し、

その短刀はオペラバッグの中に入れ、何喰はぬ顔をして、一同のところへ戻つてきたのです。』

『莫迦をいつちやいかん。』張は遮つた。『殺されたものが、動いたり、物をいつたりするだらうか。』

『張先生は、しきりと、腰井氏がそれから後に、動いたり、物をいつたりしたと、仰有るが、我が國では『問はず語り』といふ諺があるくらゐですよ。あの仕掛は、貴方の實驗室で、墓を剝いては、その筋肉に電極を立て、電流作用によつていろ／＼と思ひのまゝに動かす研究をなすつたその巧なる應用な

んです。蛙の實驗についてはこの煙山鐵夫君が、わざ／＼貴方の御説明を忝なうしたといつてますよ。』皆の後から、鐵つあんが進み出でて、張玉鵬をグツと睨みつけた。『こんなことに大人の講釋が役立つ

たア、思つてゐなかつたよ。』

『腰井氏の聲は、無論インチキです。』帆村探偵は、言葉をつゞけた。『あなたはカナリー殺人事件のやゝ進歩した方法で、フキルム仕かけの蓄音器を、腰井氏の背後で鳴らしたのです。腰井氏の首や手足を動かした装置も、貴方の新發明になる蓄音器も、大變軽く簡單にできたもので、私は一學究としては、張

先生の見事な手腕に敬意を表します。なほ、御望みとあらば、そこで持參の鞆をひらいて、證據物を、御高覽に供しませう。』

張玉鵬は黙つてゐた。

『では、この點、張君の欺瞞と認めます。』ウラミノフ氏はいつた。『それでは、腰井君の後繼者として、亡團員花岸庄兵衛君と同姓さわ君との間に設けられた一子で、埼玉縣栗橋の産、花岸つわ子嬢、通稱汐路さんに、どなたか、七墓團のバトンをお渡し下さい。』

果然、汐路は光榮ある結社七墓團の後繼團員にのぼつたのだつた。しかしそのとき、日本側の大沼部伯爵をはじめ一同はおし黙つて眼を伏せた。七墓團のバトンは、持つて來なかつたものらしかつた。

その向う側で張玉鵬は、カラカラと大聲を出して笑つた。

『バトンをお出しなさい。委員長も、お疲れですよ。』
『どうしたのです、日本の方。』たまりかねたものか、ウラミノフ氏は、再び聲をかけた。
『バトンを早くお渡しなさい。でない、日本側は失格と看做しますぞ。』

『帆村君。張玉鵬は大きな顔をゆすりあげるやうにして、あざ笑つた。『君のお手際でも、出て来ませんか。早くお出しなさい。』』

『では御免蒙つて、七墓園のバトン、靈蟾珠を御覽に入れることにしませう。』帆村探偵はさういふと、いきなり張玉鵬に飛びかかると見るや、撞とばかりに、床の上にねぢ伏せ、張の口中をグワツと開けて、なにか金具のやうなものを押しこんでみたが、軋て、やをら立ち上ると、血にまみれた右手の指尖に、眞黄色の豌豆ほどの大きさのある珠を摘みあげて、汐路の掌の上に置いた。

『では、これで幸運に充ちた七墓園のバトンをお渡しいたします。』と帆村探偵は目を輝かせていつた。『此際蛇足をつけ加へる非禮をお許し下さるならば、この靈蟾珠といふ名玉は腰井君が、その庭園に飼ふ臺の腹中に隠して置いたのを見事看破した張先生が祕かに自分の池に誘ひ、いよいよ機が熟すと、珠は臺の腹から、張先生の入齒の中へ移されたものなんです。なんと素晴らしい藝當ではありませんか。』そのとき、珠をうけとつた汐路は、どうしたものか、グツと前に身體をのめらせると、そのまま崩れるやうに床の上に仆れてしまつた。

『おお、汐路さん、しつかりなさい。』

何事の異變であるかと、汐路をとりかこむ一同の背後では、鐵つあんが、床の上に轉げてゐた張玉鵬の左手を逆に、エイヤツとねぢあげたのだつた。

『卑怯なやつだ。』鐵つあんは、眞赤になつて怒鳴つた。『こんなものを、袖の下から撃つたんだ。それで

も貴様は男かッ！』

張玉鵬の拳のうちには、小さい消音ピストルがキラリと光つてゐるのだつた。

『汐路ちゃん、敵はとつてやつたよ。』鐵つあんは、死んでゆく愛人を、逞しい腕の中にかゝへあげた。

『汐路ちゃん、判るか。鐵つあんは、お前をしつかり抱いてゐるんだぜ。』

汐路の耳底に、鐵つあんの聲がきこえたものか、だが彼女は目をひらく力もないらしく、ただ、美しく長い睫毛に、ツーツツと泪が湧いてくると見る間に、ポタリ、ポタリと、白蠟のやうな頬を滑り、鐵つあんの痙攣する腕のあたりに落ちて、彼女の最期の温味を傳へる心のやうに、感じられるのだつた。

『汐路ちゃん、お前、いつものやうに、又泣いてゐるね。』

さういふ鐵つあんも泣いてゐた。

x

風來坊の鐵つあんは、不思議な縁で、死んだ愛人汐路からバトン靈蟾珠を受け繼いだ。そして今や某所に假面を被り、結社七墓園の威力を、或る方面に驅馳してゐるといふ。

昭和八年四月一日印刷
昭和八年四月五日發行

日本小説文庫 二六六

爬蟲館事件

(定價 金參拾錢)

檢 印



著 者 海 野 十 三

發 行 者 和 田 利 彦

印 刷 者 木 呂 子 斗 鬼 次

印 刷 所 日 清 印 刷 株 式 會 社

發 行 所

東京・日本橋・通三丁目
振替・東京一六一七番

春 陽 堂

電話日本橋五一・六四一・三七八八

日本小説文庫目錄

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
星旗樓秘聞	半七捕物帳 2	半七捕物帳 1	淀君 後篇	淀君 前篇	第二の巖窟	紅蝙蝠 後篇	紅蝙蝠 前篇	井原西鶴	さんご笠	隠亡堀	闇に開く窓	關ヶ原	孤島の鬼	有憂華		
木村毅	岡本綺堂	岡本綺堂	三上於菟吉	三上於菟吉	白井喬二	長谷川伸	長谷川伸	武者小路實篤	子母澤寬	國枝史郎	里見弴	直木三十五	江戸川亂歩	菊池寛		
三六	二五	二五	四〇	四〇	二六	三三	三三	二二	二二	三三	四〇	四〇	三三	四〇		
四五	二五	二五	六〇	六〇	四五	六五	六五	二五	四五	六〇	六〇	六〇	六五	六〇		
32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
右門捕物帖 3	右門捕物帖 2	右門捕物帖 1	虹の歌	錢形平次捕物控 1	愛人 後篇	愛人 前篇	陰獸	新選組物語	澤村田之助後篇	澤村田之助前篇	青眉 後篇	青眉 前篇	砂繪呪縛 後篇	砂繪呪縛 前篇	唐人お吉	唐人お吉
佐々木味津三	佐々木味津三	佐々木味津三	長田幹彦	野村胡堂	細田民樹	細田民樹	江戸川亂歩	子母澤寬	矢田挿雲	矢田挿雲	久米正雄	久米正雄	土師清二	土師清二	十一谷義三郎	十一谷義三郎
三六	三六	三六	四〇	三三	四〇	四〇	二二	二二	三三	三三	三三	三三	四〇	四〇	三三	三三
六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	二五	四〇	六五	六五	六〇	六〇	六〇	六〇	六五	四〇

49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33
清水の次郎長前篇	南國太平記後篇	南國太平記中篇	南國太平記前篇	戸並長八郎後篇	戸並長八郎前篇	女殺延命院	草に祈る	戀愛黒點 後篇	戀愛黒點 前篇	愛憎の彼方後篇	愛憎の彼方前篇	仇討五十三次	銀河 後篇	銀河 前篇	笑の王国	沈鐘と佳人
村松梢風	直木三十五	直木三十五	直木三十五	長谷川伸	長谷川伸	土師清二	櫻井忠温	正木不如丘	正木不如丘	中村武羅夫	中村武羅夫	佐々木味津三	加藤武雄	加藤武雄	佐々木邦	白井喬二
三六	四〇	四〇	四〇	三三	三三	三三	二二	二二	三三	三三	三三	二二	三三	三三	三三	二二
六〇	六〇	六〇	六〇	六五	六五	六五	四〇	四五	四五	六五	六五	四五	六〇	六〇	六五	四〇
66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50
祖國は何處へ4	祖國は何處へ3	祖國は何處へ2	祖國は何處へ1	人間 饑	浅草紅團	太陽!隣人!後篇	太陽!隣人!前篇	蜘蛛 男	蟲	敵討雑記帳後篇	敵討雑記帳前篇	右門捕物帖 4	菊一文 字	盲目の目撃者	蛭川博士	清水の次郎長後篇
白井喬二	白井喬二	白井喬二	白井喬二	村松梢風	川端康成	十一谷義三郎	十一谷義三郎	江戸川亂歩	江戸川亂歩	直木三十五	直木三十五	佐々木味津三	吉川英治	甲賀三郎	大下宇陀兒	村松梢風
四〇	四〇	四〇	四〇	三三	三三	三三	三三	四〇	四〇	二二	二二	三三	三三	四〇	三三	四〇
六〇	六〇	六〇	六〇	六五	四五	六五	六五	六〇	四五	四五	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇

117 116 115 114 113 112 111 110 109 108 107 106 105 104 103 102 101

諸國捕物帳
愛すればこそ
痴人の愛
珠の上の悪魔
掌の上の悪魔
續右門捕物帖1
續右門捕物帖2
朱面組傳奇前篇
朱面組傳奇後篇
相馬大作
杳掛時次郎
險の母
松平長七郎青春記
風雲天滿双紙
三浦老人昔話
青蛙堂鬼談
近代異妖篇

額田六福
谷崎潤一郎
谷崎潤一郎
龍膽寺雄
龍膽寺雄
佐々木味津三
佐々木味津三
下村悦夫
下村悦夫
額田六福
長谷川伸
長谷川伸
下村悦夫
佐々木味津三
岡本綺堂
岡本綺堂
岡本綺堂
岡本綺堂

三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇

133 132 131 130 129 128 127 126 125 124 123 122 121 120 119 118

探偵夜話
古今探偵十話
大地に立つ前篇
大地に立つ後篇
東洲齋寫樂
饗宴前篇
饗宴後篇
天草美少年録
心理試験
煙幕
東京行進曲
半七捕物帳9
半七捕物帳10
半七捕物帳11
いたづら小僧日記
青春行狀記前篇

岡本綺堂
岡本綺堂
野村愛正
野村愛正
邦枝完二
加藤武雄
加藤武雄
佐々木味津三
江戸川亂歩
櫻井忠温
菊池寛
岡本綺堂
岡本綺堂
岡本綺堂
佐々木邦
直木三十五

三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇

83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67

祖國は何處へ5
祖國は何處へ6
祖國は何處へ7
半七捕物帳3
半七捕物帳4
日本嬢(ミスニ)前篇
日本嬢(ミスニ)後篇
侍ニッポン
西南戦争前篇
西南戦争後篇
旗本退屈男前篇
旗本退屈男後篇
唐人船
英五郎ふたり
投げ節彌之
逃げる旗本
島原美少年録

白井喬二
白井喬二
白井喬二
岡本綺堂
岡本綺堂
群司次郎正
群司次郎正
群司次郎正
平山蘆江
平山蘆江
佐々木味津三
佐々木味津三
平山蘆江
平山蘆江
子母澤寛
子母澤寛
子母澤寛
木村毅

三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇

100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84

半七捕物帳5
半七捕物帳6
黄金假面
一寸法師
半七捕物帳7
半七捕物帳8
日輪前篇
日輪後篇
清河八郎前篇
清河八郎後篇
瀧河八郎後篇
獵奇の果
艶麗風土記前篇
艶麗風土記後篇
神風時雨組
白蔵八景
忠臣蔵八景
一刀流物語

岡本綺堂
岡本綺堂
江戶川亂歩
江戶川亂歩
岡本綺堂
岡本綺堂
三上於菟吉
三上於菟吉
三上於菟吉
三上於菟吉
三上於菟吉
三上於菟吉
江戶川亂歩
小島政二郎
小島政二郎
佐々木味津三
三上於菟吉
本山荻舟
本山荻舟

三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇 三六〇

181 180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166

診療簿餘白	三太郎	霧の中の曙	小市の戯れ	神々の戯れ	丹那トネル	ゴーストツブ	博士邸の怪事件	殺人曆 外三篇	假面の輪舞外四篇	殺人狂想曲外二篇	荒野の秘密	木賊の秋	祇園小唄 4	祇園小唄 3	祇園小唄 2
正木 不如丘	正木 不如丘	野村 愛正	吉屋 信子	佐藤 春夫	岩藤 雪夫	貴司 山治	濱尾 四郎	横溝 正史	佐々木 俊郎	水谷 準	甲賀 三郎	正木 不如丘	長田 幹彦	長田 幹彦	長田 幹彦
三六〇	四六〇	二四五	二四五	三六五	近刊	四六〇	三六〇	三六〇	二四五	三六〇	二四五	二四五	三六〇	三六〇	三六〇

197 196 195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182

まぼろし峠前篇	無頼三代	銭形平次捕物控 3	銭形平次捕物控 2	死染血染 後篇	死染血染 前篇	女房を拾ふまで	口笛吹いて百萬兩	細君解放記	花嫁戯語	半處女	女可愛いや	刀をぬいて	どぜう地獄	夫唱婦唱	愛は何所まで
佐々木味津三	子母澤 寛	野村 胡堂	野村 胡堂	直木 三十五	直木 三十五	細木原青起	和田 邦坊	寺尾 幸夫	中村 正常	丸木 砂土	和田 邦坊	岡本 一平	岡本 一平	寺尾 幸夫	寺尾 幸夫
四六〇	二四〇	近刊	三六五	三六五	三六五	二四五	四〇	四六〇	四六〇	三六〇	二四五	二四五	二四五	三六〇	三六〇

149 148 147 146 145 144 143 142 141 140 139 138 137 136 135 134

緑衣の聖母後篇	緑衣の聖母前篇	女秘書	接吻市場 後篇	接吻市場 前篇	吉良家の人々	鳩笛を吹く女	かんく 蟲は唄ふ	江戸城心中後篇	江戸城心中前篇	殺人 鬼後篇	殺人 鬼前篇	決闘介添人	恐怖の齒型	お傳地獄	青春行狀記後篇
長田 幹彦	長田 幹彦	丸木 砂土	邦枝 完二	邦枝 完二	森田 草平	吉屋 信子	吉川 英治	吉川 英治	吉川 英治	濱尾 四郎	濱尾 四郎	大下 宇陀兒	大下 宇陀兒	鈴木 泉三郎	直木 三十五
三六五	三六五	三六〇	三六五	三六五	三六〇	三六五	三六〇	三六五	三六五	三六五	三六五	二四五	四六〇	二四五	四六〇

165 164 163 162 161 160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150

祇園小唄 1	太陽のない町	支那	木曾路の鴉	近世俠客ばなし 後	銃	新編乃木將軍	由利旗江	螢草 後篇	螢草 前篇	生きとし生けるもの	心驕れる女後篇	心驕れる女前篇	安城家の兄弟後篇	安城家の兄弟中篇	安城家の兄弟前篇
長田 幹彦	徳永 直	前田河廣一郎	子母澤 寛	子母澤 寛	櫻井 忠温	櫻井 忠温	岸田 國士	久米 正雄	久米 正雄	山本 有三	佐藤 春夫	佐藤 春夫	里見 諤	里見 諤	里見 諤
三六〇	三六五	三六〇	二四五	三六〇	三六五	三六五	四六〇	三六五	三六五	三六〇	二四五	二四五	四六〇	四六〇	三六五

249 248 247 246 245 244 243 242 241 240 239 238 237 236 235 234

一騎打物語	銀猫金猫	結婚適齡記	異妖新編	祖國は何處へ9	祖國は何處へ8	女性の切札	浪人しぐれ笠	神風連	今年竹後篇	今年竹前篇	モダンマダム行狀記	大川端	時を歩む子等	彼女の道	漁夫
鈴木彦次郎	村松梢風	寺尾幸夫	岡本綺堂	白井喬二	白井喬二	畑耕一	子母澤寛	長田幹彦	里見稔	里見稔	浅原六朗	小山内薫	芹澤光治良	吉屋信子	藤澤恒夫
三六〇	三六五	近刊	三六〇	二四〇	二四〇	三六〇	近刊	近刊	三六五	三六五	二四〇	二四〇	三六〇	三六〇	二四〇

265 264 263 262 261 260 259 258 257 256 255 254 253 252 251 250

氷の涯	灰人	喬二捕物集3	喬二捕物集2	喬二捕物集1	肥料と花	大東京の屋根の下	黄色い窓後篇	黄色い窓前篇	人生ふらふ道中	吸血鬼	鳴門秘帖4	鳴門秘帖3	鳴門秘帖2	鳴門秘帖1	花骨牌
夢野久作	大下宇陀兒	白井喬二	白井喬二	白井喬二	北村小松	加藤武雄	細田民樹	細田民樹	和田邦坊	江戸川亂歩	吉川英治	吉川英治	吉川英治	吉川英治	湊邦三
近刊	近刊	近刊	近刊	三六〇	二四五	三六五	近刊	二六五	近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	近刊

217 216 215 214 213 212 211 210 209 208 213 202 201 200 199 198

奇談クラブ2	奇談クラブ1	處女刑後篇	處女刑前篇	不壊の白珠	新女性鏡	傾ける大地	港の唄	妖魔の哄笑後篇	妖魔の哄笑前篇	安中草三後篇	安中草三前篇	安中草三前篇	安中草三前篇	歌麿をめぐる女達	まぼろし峠後篇
野村胡堂	野村胡堂	群司次郎正	群司次郎正	菊池寛	菊池寛	賀川豊彦	長田幹彦	甲賀三郎	甲賀三郎	三遊亭圓朝	三遊亭圓朝	三遊亭圓朝	三遊亭圓朝	邦枝完二	佐々木味津三
三六五	三六五	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	四六〇	四六〇	二四五	二四五	三六〇	三六〇	二四五	二四五	四六〇	四六〇

233 232 231 230 229 228 227 226 225 224 2 3 222 221 220 219 218

しも彼等に行く	春秋編笠ぶし	牢獄の花嫁後篇	牢獄の花嫁前篇	陽に叛く者	押繪の奇蹟	電氣風呂の怪死事件	軍事探偵(明石將軍)	闇に蠢く	白魔	宙に浮く首	盲獣	魔術師	疑問の黒棒	戀愛曲線	奇談クラブ3
下村千秋	吉川英治	吉川英治	吉川英治	松村梢風	夢野久作	海野十三	白石實三	江戸川亂歩	大下宇陀兒	大下宇陀兒	江戸川亂歩	江戸川亂歩	小酒井不木	小酒井不木	野村胡堂
近刊	二六五	二四五	二四五	二四五	三六五	三六五	近刊	近刊	二四〇	三六五	二四五	二四五	三六五	二四〇	四六〇

